

photopos 44

2017.8.17 ~ 2017.9.10

【神秘学ポエジー～風遊戯 第88集】

photo ヴァージョン

photopos1076-1100

神秘学遊戯団

photopos-1076

2017.8.17



はるか
天空より
次々と舞い降りる
水の精は

緑の掌に抱かれ
透きとおった
水晶のような
珠になります

そして
光のなかで
ふるえながらも
静かに世界を映しだします

はるか
天空より
次々と舞い降りる
魂たちも

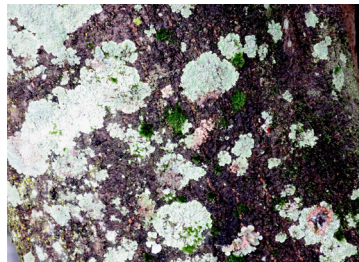
大地に抱かれ
光のなかで
世界を映しだす
珠になるのでしょうか



※岡山県総社・国分寺にて

photopos-1077

2017.8.18



樹は化粧する

じぶんで化粧したいと思うのか
だれかがお化粧してやろうとお節介するのか
お祭りのようなおめかしをして
ぼくに挨拶を返してくる

樹は大地になる

そこでは他の生きものたちが
寄りかかって生きている
好んで共生しているのか
ただ平然としているだけなのかは知らないが
ぼくもときに寄りかかりたくなったりする

樹は見ている

時を超えて見ているようだ
樹が見ているからこそ
大地は天に憧れるのかもしれない
樹に見られていると
ぼくのなかの大地も天を仰ごうと上を向く

photopos-1078

2017.8.19



光あれ！
すると
そこに光は顕れる

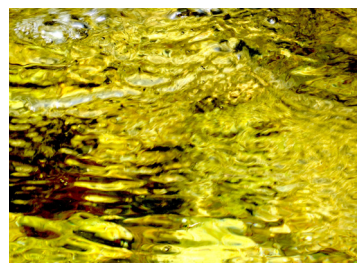
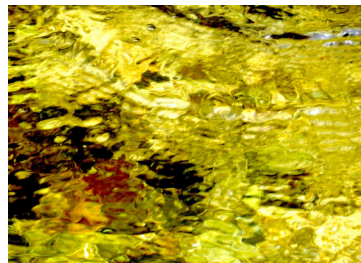
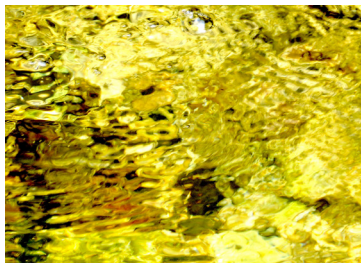
気がかりなことで
つぶれそうなときは
光の魔法を思い出せばいい

光は隠れなき姿だけを
照らしてくれるはずだから

水よ鎮まれ！
すると
水は穏やかに流れはじめる

流されてすぎて
じぶんを見失いそうなときは
水の魔法を思い出せばいい

水は私という流れの形へと
おのずと流れてくれるはずだから



※松山市北条にて

photopos-1079

2017.8.20



門という
境域の上で

見守っているのか
見張っているのか

古き寺の門の上で
永き時を過ごすものたち

私という
境域の上で

見守っているのか
見張っているのか

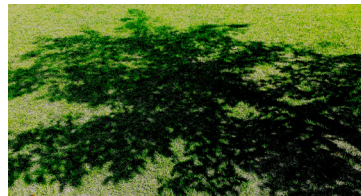
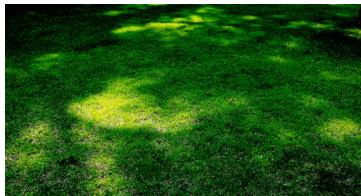
多次元を旅する私という存在の上で
永き時を過ごすものたち



※愛媛県大洲市・金山出石寺にて

photopos-1080

2017.8.21



※松山市・堀之内にて

不意に
ひとつの樹が
立ち上がり
心のなかに
光と影の模様をつくる

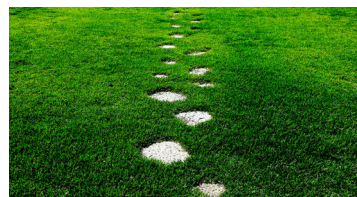
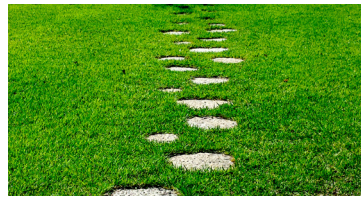
歩けば樹は詠い
光はゆれ影はゆれ
不意に
私はいなくなる

そして
象徴の言葉が訪れ
心の合わせ鏡のなかに
有と無の模様を描くのだ

歩けば言葉は詠い
有は無へ無は有へ
無限に照らし合う
不思議曼荼羅

photopos-1081

2017.8.22



※松山市・堀之内にて

足跡を辿るか
じぶんで足を踏み入れるか

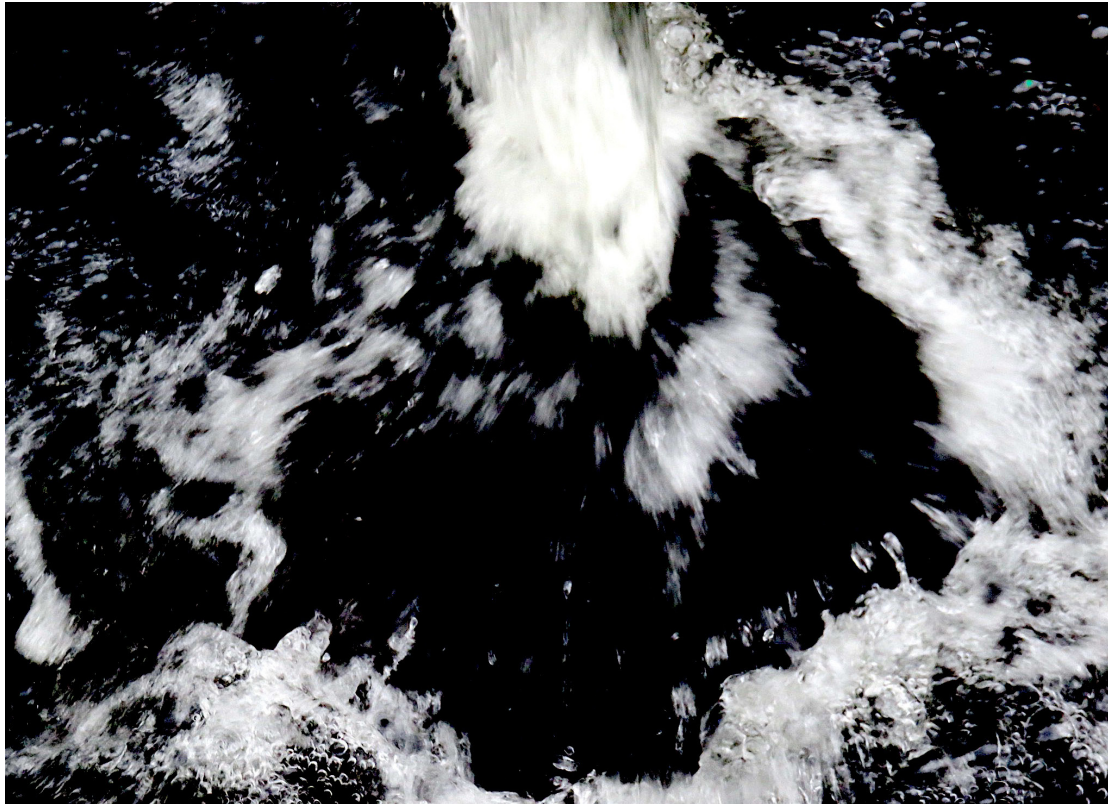
未知に足を踏み入れるときにも
足跡を辿ってみることは
助けになるだろう

けれども足跡は
やがて途切れることもあるだろうし
望む場所へ導いてくれるとはかぎらない

そこからは
じぶんでじぶんを辿らせなければならない
そこからの
はじめて道になるのだから

photopos-1082

2017.8.23

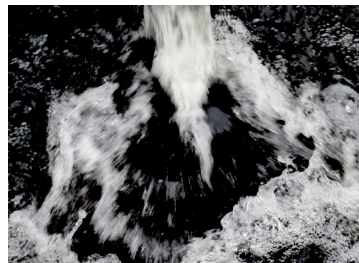
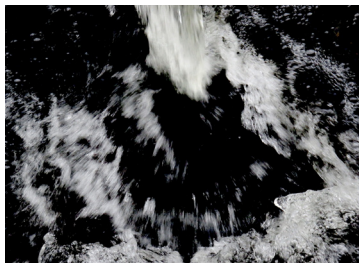


見る前に跳ぶか
見た後では跳べないのか

前でも後でもないものが
なければならぬのではないか

跳ぶためには意志が必要だが
それが過去から来るとき
その衝動には注意することだ

意志は彼方から
みずからの深みから
みずからの祈りから
来たるときこそ
光であり得るのだから



※岡山県総社国分寺にて

photopos-1083

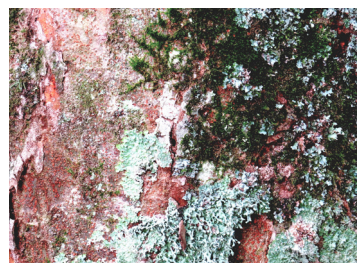
2017.8.24



見知らぬものとともにあるとき
私のなかの星座は変わり
私は見知らぬものになる

見知らぬものになるために
旅する人があり
見なれたじぶんから離れぬまま
旅する人がある

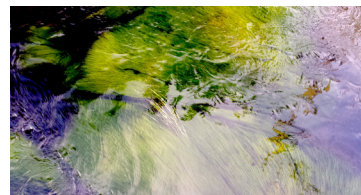
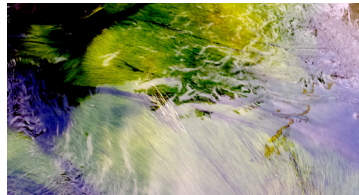
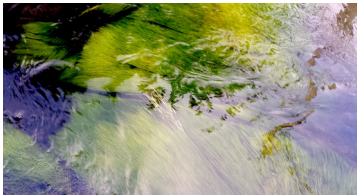
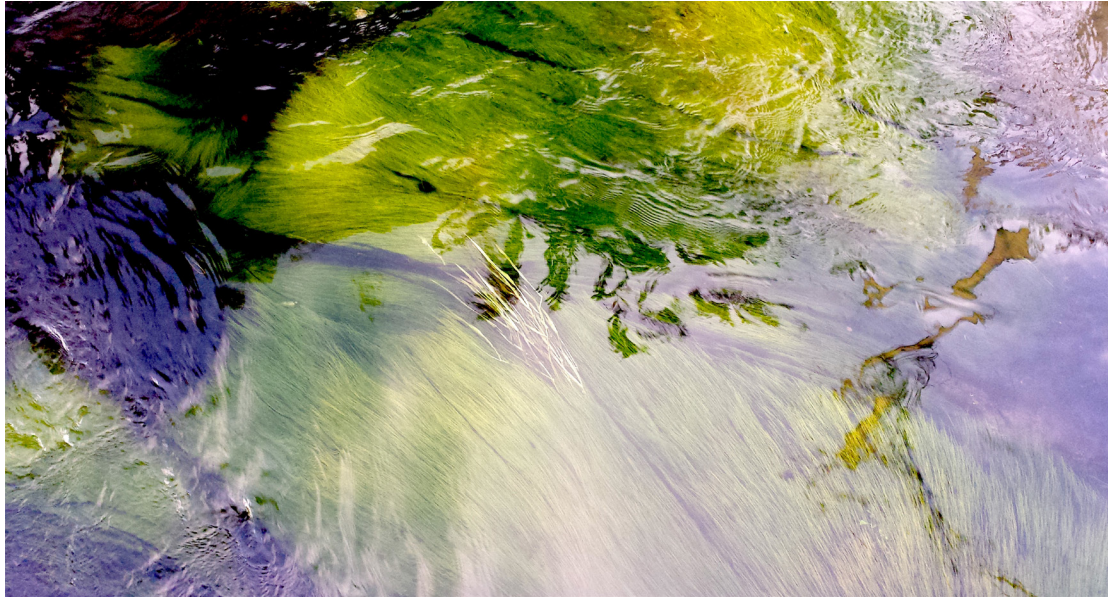
生まれるというのも旅だ
生のなかで新生するのも旅
見知らぬものになることで
人は新たなものを加え
やがて人をも超えてゆく



※愛媛県大洲市・金山出石寺にて

photopos-1084

2017.8.25



※松山市南江戸・夕暮れの用水路にて

妖しの地図の水の色
逢魔が時に染まりゆく
そこから鬼もでるそうなの

人の心は妖しかろ
おのれの内の底無し沼に
映した心の水鏡
割りて生成りになるという

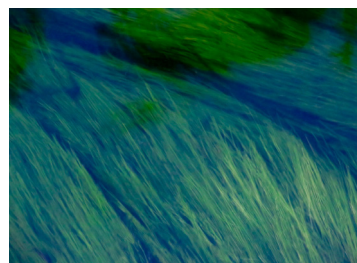
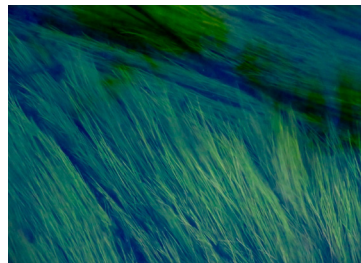
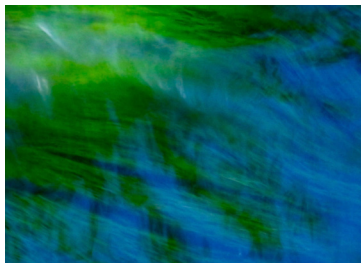
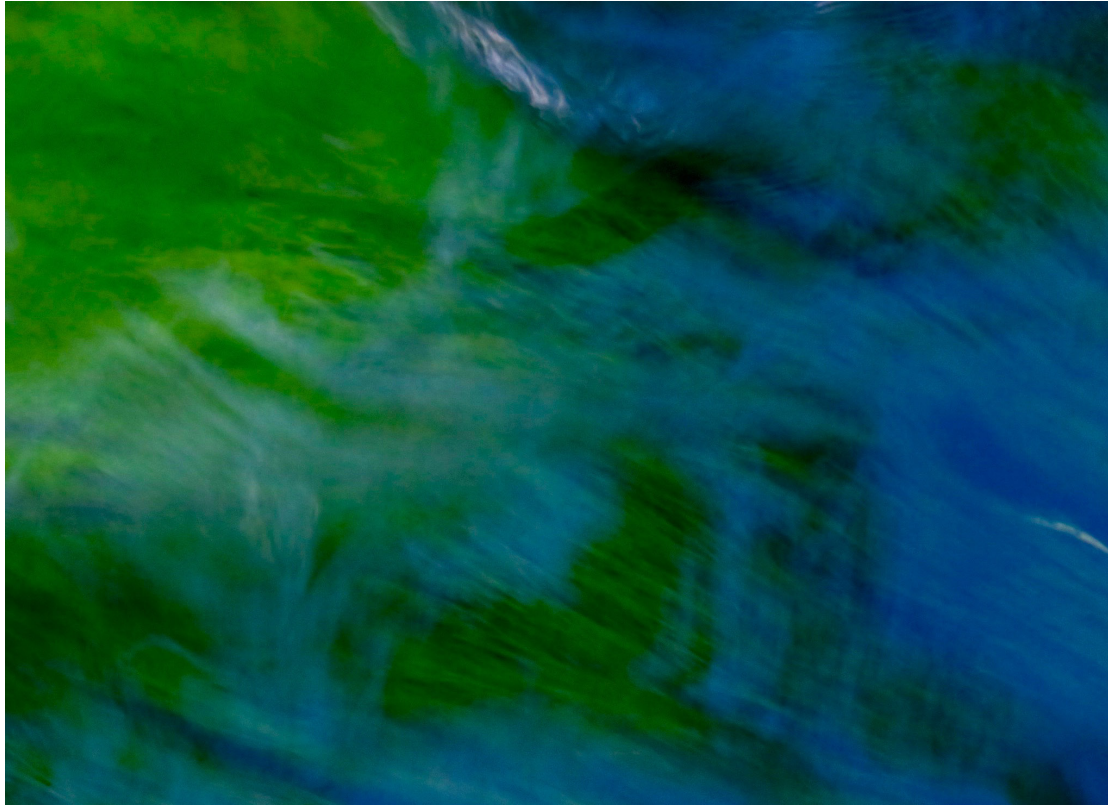
鬼はもともと人なのぞ
人はもともと神なのぞ
されども人は生成りに
それさえ化けて般若となりて
鬼の面をばつけたがる

鬼になったらなんしょう
夜明けの晩に我が姿
鏡の正面見れりやせぬ
鶴と亀とのすべった晩に
後ろの鏡を見ればよい

後ろの正面映したならば
鬼神の姿変化（へんげ）して
籠目のなかから出ておじやる
涙流して出ておじやる

photopos-1085

2017.8.26



※松山市南江戸・夕暮れの用水路にて

夜の帳が降りてくると
昼の眼は閉じてゆき
夜の眼が開いてゆく

見えぬものこそ
見るべきもの
そろそろ
われらの領分
じゃないかえ

現と夢の間に間に
ひそやかな声が訪れ
俄に風も吹き始める

見えぬものは
飼い慣らされちゃあいない
心の奥に隠しておいた
闇の獣も吠えるだろうが
そんなこたあしれたこと

闇のなかで
月の光を浴びて
夜の銀の眼が光りはじめる

光を探すには
闇のなかこそ打って付けだが
はてさて昨今の闇は
ねっとりと深い
ゆるりと光の種を探そうぞ

photopos-1086

2017.8.27



幽明の時のなかを
育ちゆくものあり

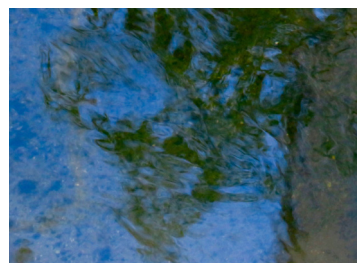
だれにも知られず
秘かに秘かに訪れ

天空より種は降り
大地に蒔かれ育ち

幽き息で祝うよう
祈りの声を水音に

風のごとき姿もて
花のごとき姿もて

沈黙の母胎の内で
言葉は紡がれゆく



※松山市南江戸・夕暮れの用水路にて

photopos-1087

2017.8.28



水の花は咲き
水の花は散る

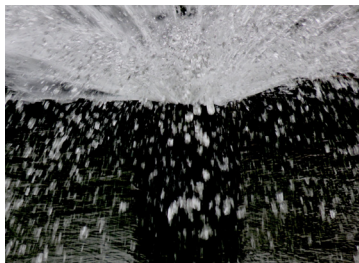
水の花に名はないように
我が花にも名はない

水が水へと還っていくように
我が水もまた還ってゆく

花がうつろいであるように
我が花もまたうつろう

されどみずからを去ることでこそ
花は新たな姿へと変容してゆくように

我もまた我を去ることでこそ
新たな姿へと変容してゆくのだ



※松山市・堀之内にて

photopos-1088

2017.8.29

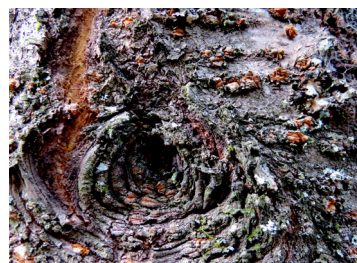
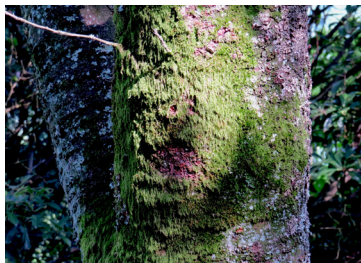


存在するということは
ひどく滑稽なことじゃないかい

滑稽を乗り越えて
悲しくなってしまうほどさ

悲しみを笑いに変えて
戯けて生きるのが関の山か

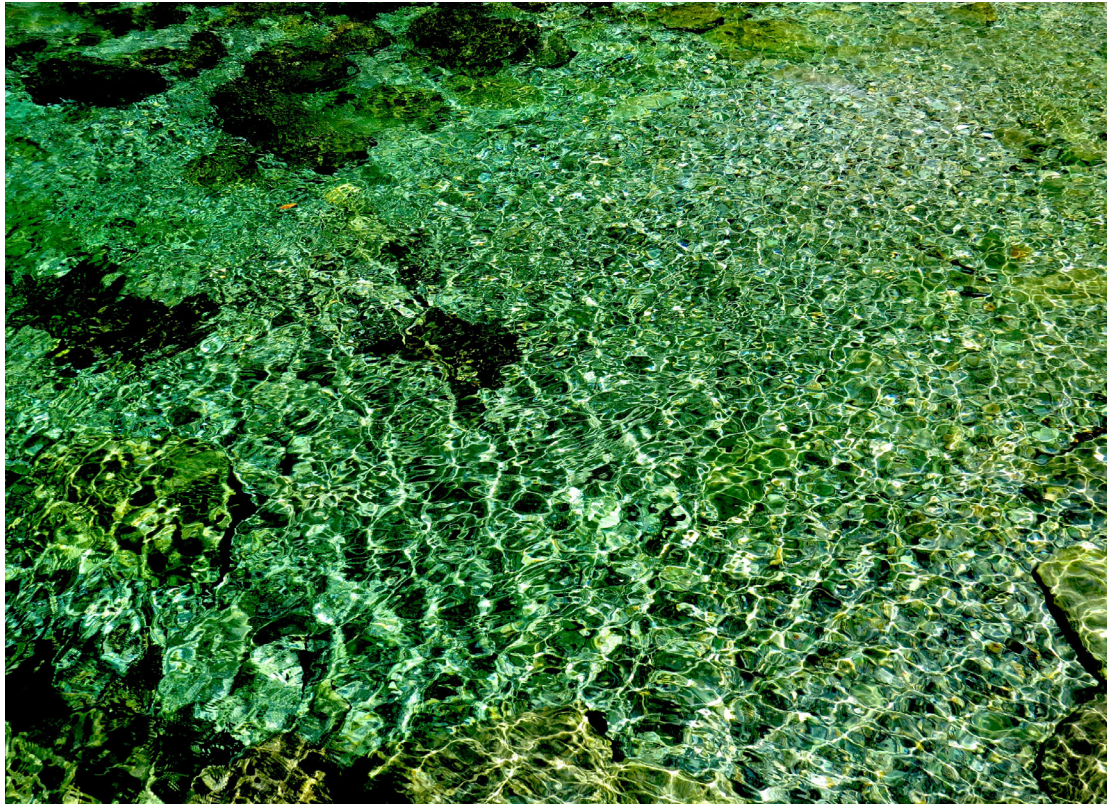
すべてを見ている眼を忘れちゃいけないぜ
悲しみを愛しみにさえ変えてくれる眼を



※愛媛県伊予市・谷上山にて

photopos-1089

2017.8.30



言葉はいらない
言葉で掬える水はないのだから

言葉はいらない
言葉では喉を潤せやしないから

言葉はいらない
言葉は流れることなんかできないから

それでも言葉は
透明で自由な水になる
そんな夢を見ているのかもしれない

言葉はいらない
言葉は光にはなれないのだから

言葉はいらない
言葉は色を持ってやしないから

言葉はいらない
言葉で見ることなんかできないから

それでも言葉は
闇のなかの光になる
そんな夢を見ているのかもしれない

※高知県仁淀川町・安居溪谷の思い出から

photopos-1090

2017.8.31



※高知県仁淀川町・安居溪谷の思い出から

天に向かって
懸命に伸ばされた手は
なにをつかむのだろう

重力は悲しみを生むが
それに逆らって伸ばされる手は
虚しく新たな悲しみをつかんでしまう

望むものはなくなるだろうが
望むものを得たとき人はもはやそれを
望んでいないことに気づくように

変わらぬものを求めても
人は変わることしか
変わらぬものに気づけないだろう

終わらないものはなにもない
そして人は終わることのために
始めようとするのではないか

ならば
その手は
天に向かって捧げられた
祈りでもあるといえよう
虚空こそが真実であるかのように

photopos-1091

2017.9.1



さいわい なるかな
さいわい なるかな

水の声
輪となり

さいわい なるかな
だいちの めぐみ

水の声
広がり

さいわい なるかな
やさしき かぜよ

水の声
交わり

さいわい なるかな
いとしき はなよ

水の声
溶けあい

さいわい なるかな
たえなる ひかり

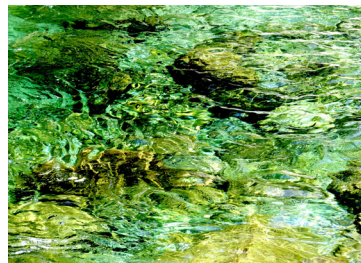
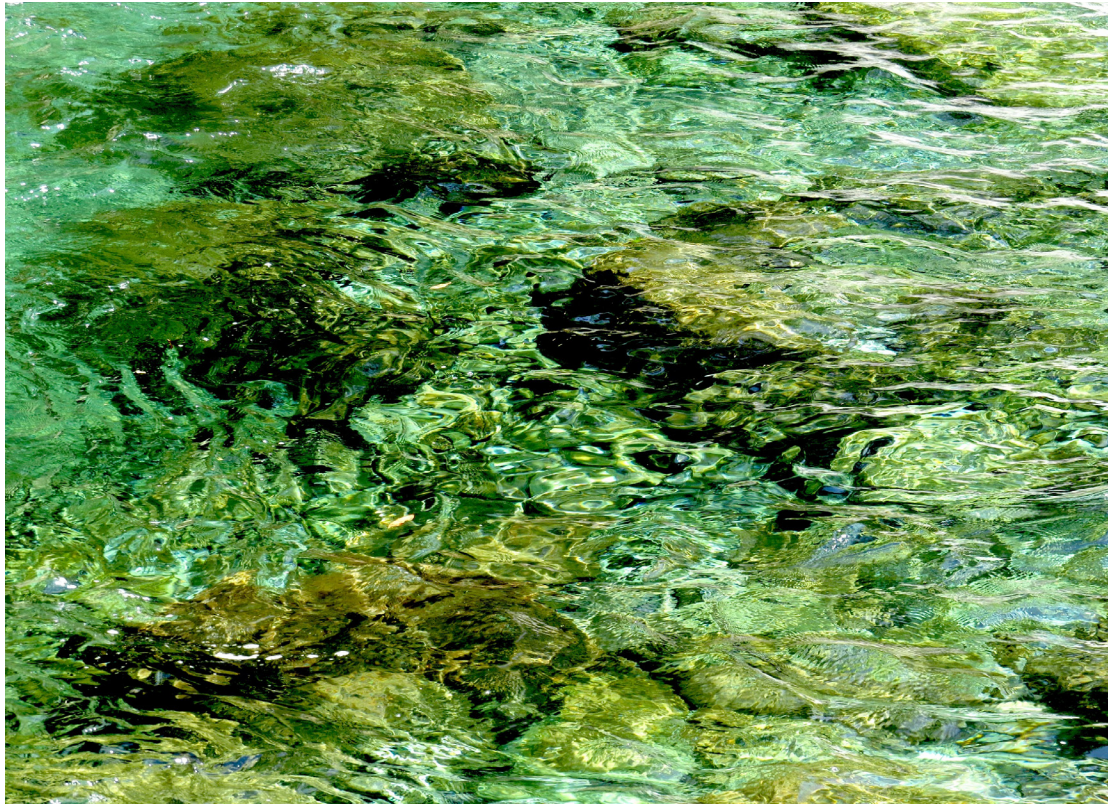
水の声
コラール



※高知県仁淀川町・安居溪谷の思い出から

photopos-1092

2017.9.2



※高知県仁淀川町・安居溪谷の思い出から

歌を忘れた
わたしのころ
忘却の川に
流しましょ

いえいえ
それは
せつなかる

歌を忘れた
わたしのころ
記憶の墓に
埋めましょか

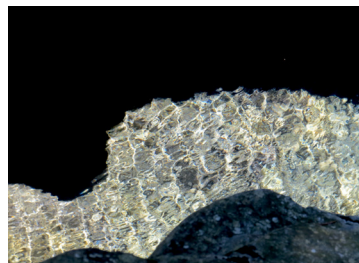
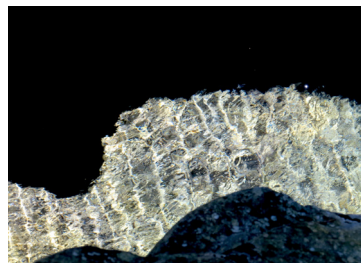
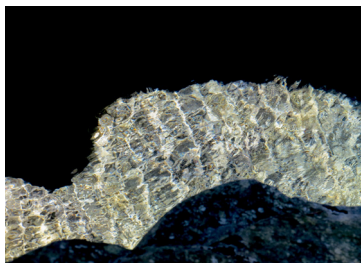
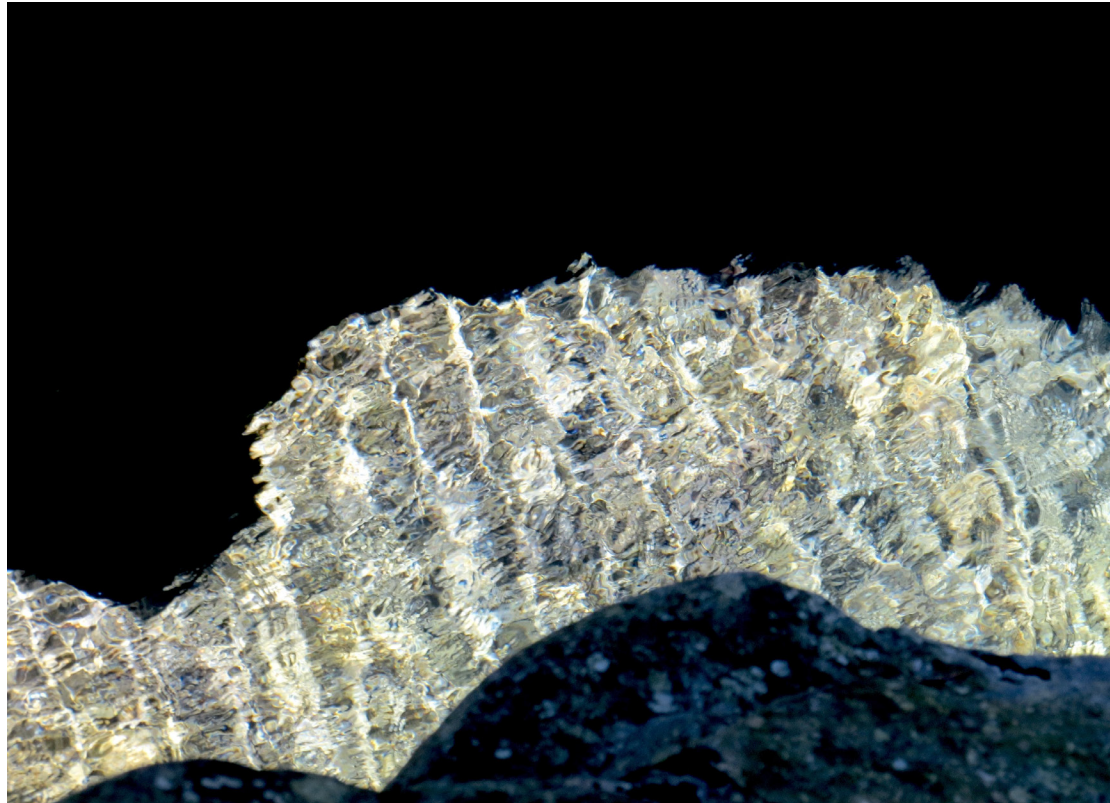
いえいえ
それも
はかなかる

歌を忘れた
わたしのころ
思い出流れる
不思議の夢に

せつなさ
はかなさ
浮かべれば
忘れた歌を
思い出す

photopos-1093

2017.9.3



スフィンクスのなぞなぞ
答えは人間だが
むしろこう問うべきなのだ
答えは人間だが
人間とはどういう存在なのだと

ソクラテスの飽くなき問いのように
人間を答えとする
あらゆる問いを問わねばならない

答えは5だが
5が答えになる問いを問え
というように

答えることで
思考停止になるわけにはいかない
問いを問うことで
問いの地平の境を越えねばならないのだ

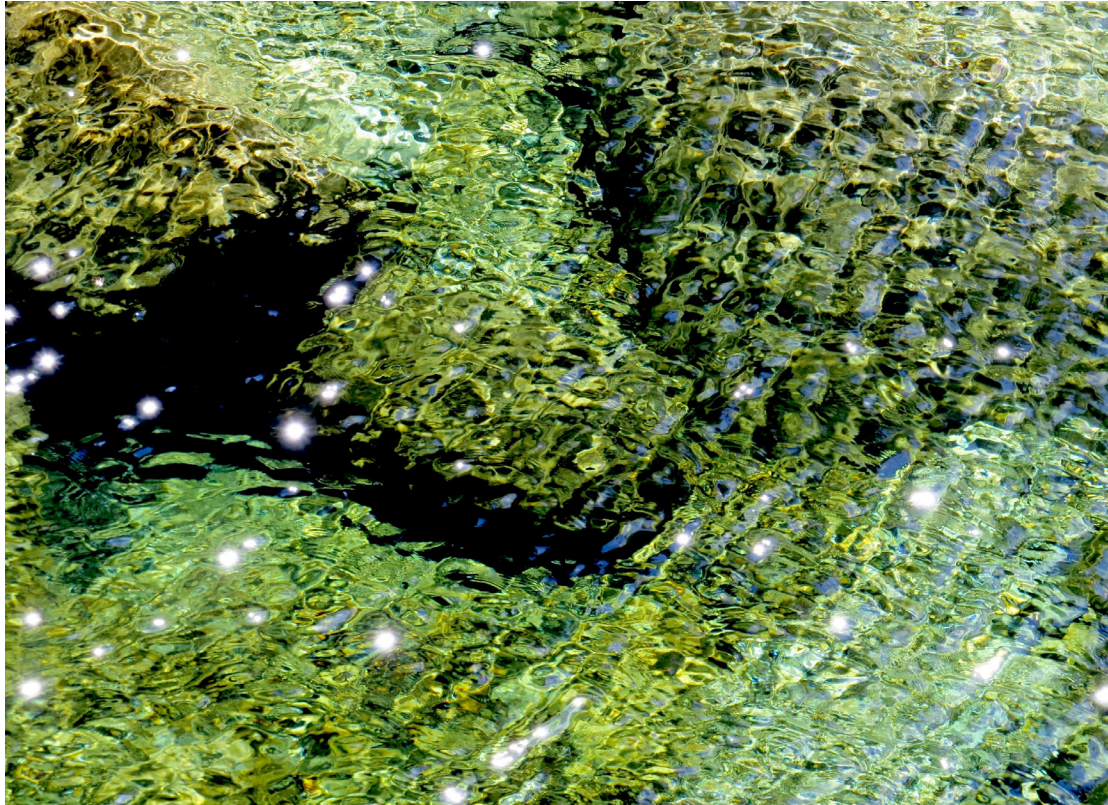
時間を問うということは
時間を越える地平を問うことだ
存在を問うということは
存在を越える地平を問うことだ
自我を問うということは
自我を越える地平を問うことだ

問いの境域を越える問いこそが
本来のスフィンクスの問いでなければならない

※愛媛県久万高原町・面河溪にて

photopos-1094

2017.9.4



光よ集まれ
魂の惹かれるままに

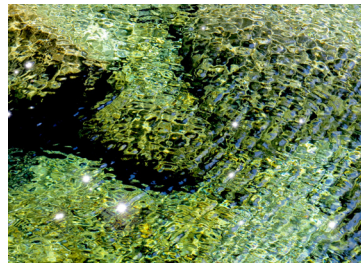
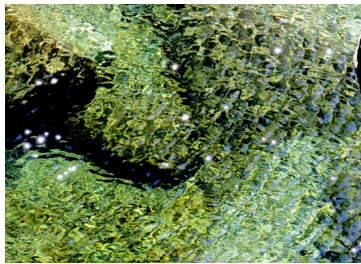
闇のなかでようやく
めざめた光よ

みずからの光を見出すために
闇を生きた光よ

光のなかで
みずからを見失うことなかれ

みずからを見失った光は
また闇へと還らねばならない

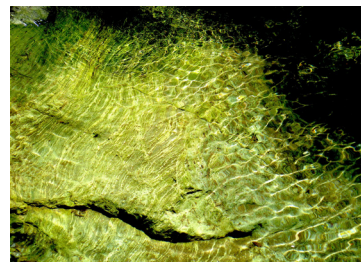
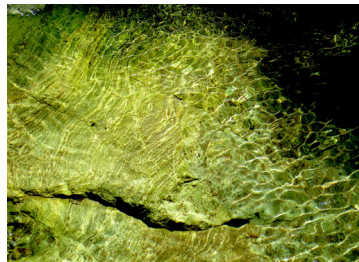
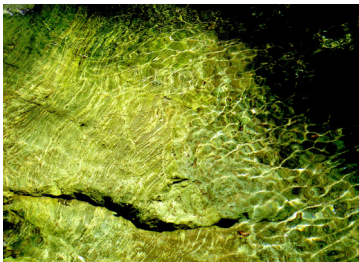
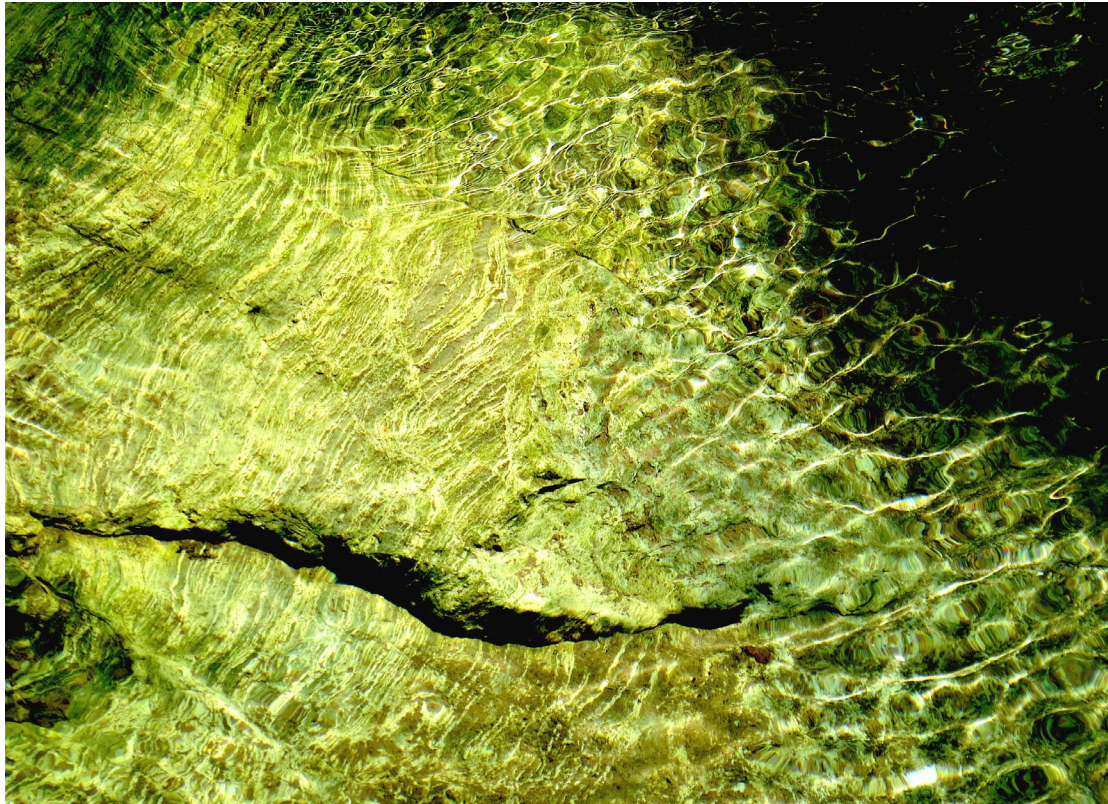
その繰り返しのなかで
みずからの姿を新生させるために



※愛媛県久万高原町・面河溪にて

photopos-1095

2017.9.5



水鏡の森には
魔物が棲む

思い出せ
思い出せ
忘れた
じぶんを

気をつけな
魔物のささやき声に

あまりにも
忘れっぽい者よ
おまえは
おまえの記憶なのだ
ならば
忘れられたおまえは
いったいだれなのだ

魔物は映すのだ
見えないはずの鏡の奥を

おまえは
記憶の切れ端を
つなぎ合わせて
おまえという役を
つくりあげている

魔物は笑うのだ
水鏡の森で

おまえの演技は
完璧すぎる
演技していることさえ
じぶんという観客さえも
忘れてしまっているほどに

魔物は映すのだ
見えないはずの顔を

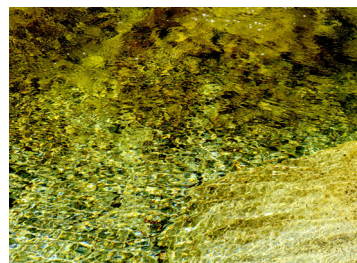
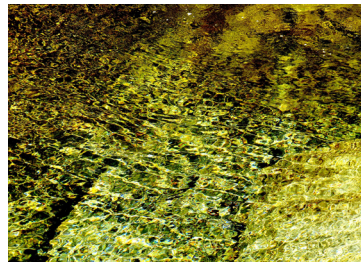
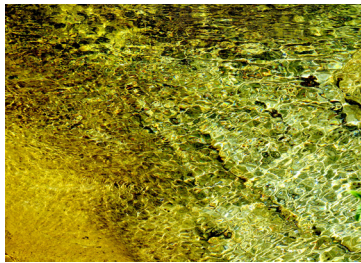
ならば
思い出させてくれようぞ
おまえの闇の川底に
置き去りにした
ほうら
こんな顔を…

魔物はときに悪戯をする
水鏡の森で

※愛媛県久万高原町・面河溪にて

photopos-1096

2017.9.6



新生するためには
あのなつかしき場所へ
帰らねばならない

地図はなく
教える者もないけれど

新生するためには
永遠の未生の場所へ
旅立たねばならない

どこにもない
時の深みで歌われる場所へ

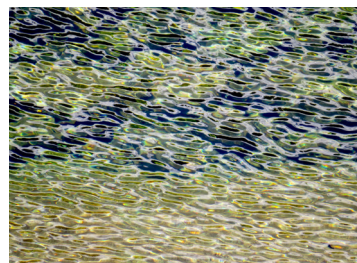
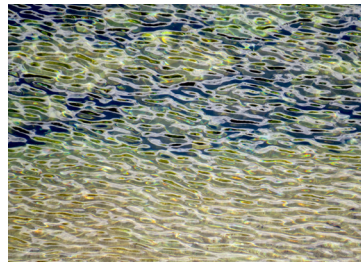
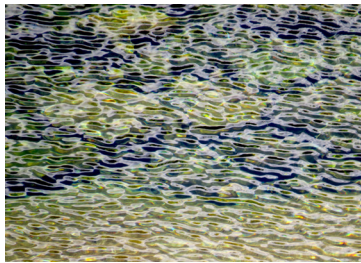
新生するためには
私であることを
去私のなかで生きねばならない

あらゆる私が生まれ来る
あのなつかしき源へと遡り

※愛媛県久万高原町・面河溪にて

photopos-1097

2017.9.7



※愛媛県久万高原町・面河溪にて

迷っているときには
さ迷えばいい
ゆれているときには
ただゆれていればいい

永遠ばかりを見つけるときは
気をつけた方がいい
生きていることが
どこか上の空になっているから

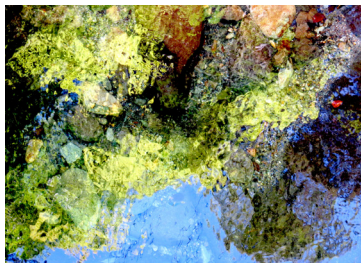
心は刹那を映すから
永遠を見つけるのは難しいのだ
スクリーンは今を映し
光はどこか彼方からやってくる

スクリーンにいるじぶんは
いまはスクリーンにいるのだ
光の源を探して
スクリーンを出ることはできない

動いているのは
スクリーンの上のじぶんだ
永遠はいつも光の源にあるとしても
いまはスクリーンの上で動く方がいいのだ

photopos-1098

2017.9.8



※愛媛県久万高原町・面河溪にて

夜の心は
夢を散歩する

昼の心は
記憶を閉じ込めるから
心は決まった道しか歩けない

夜の心は
決まった道など歩かない
姿だって決まっていない

空だつてとべる
海にだつて潜れる
何にだつてなれる
誰にだつて会える

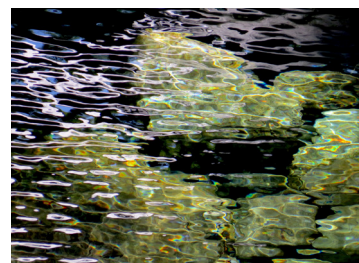
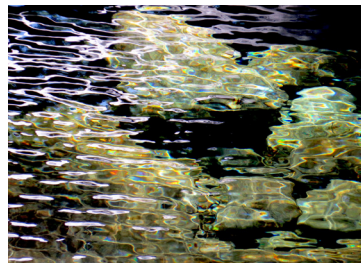
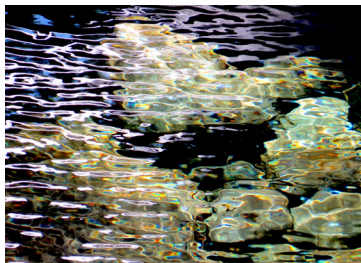
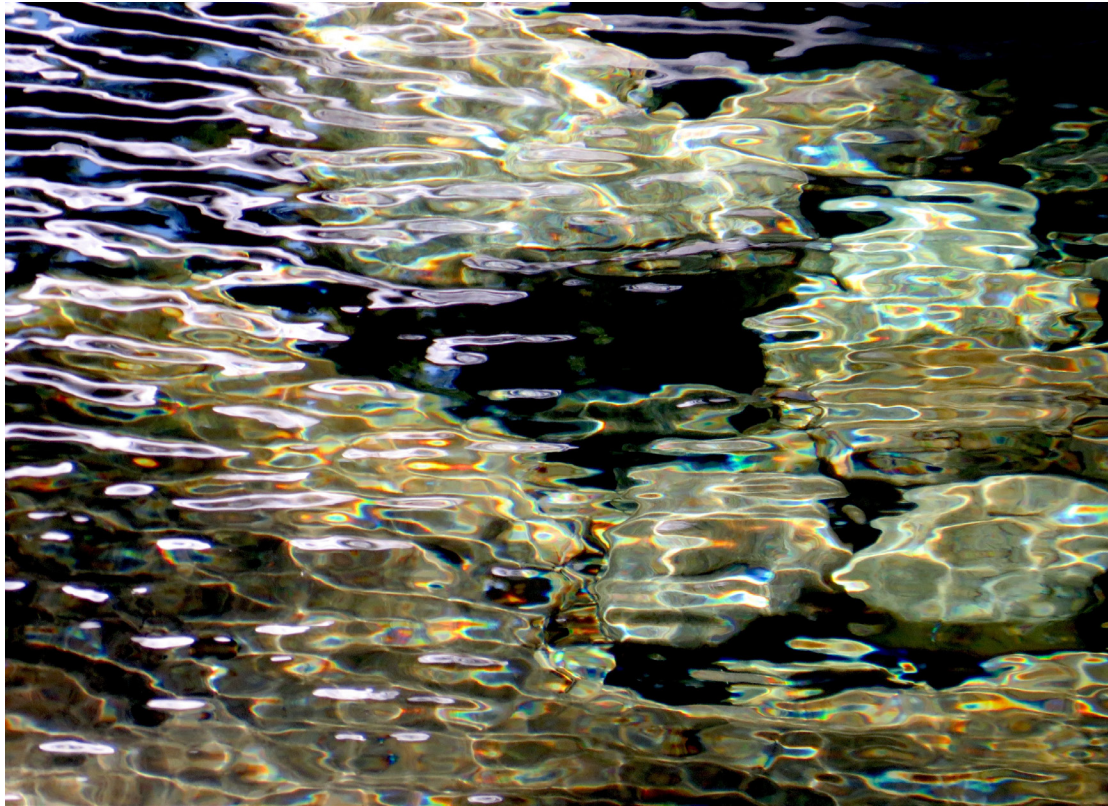
夜の心は
ぼくなど気にしない
ぼくでなくたっていい

決まったぼくなどないから
いろんなぼくを体験する
けれどほんとうは
どこかでぼくとつながっている

昼の心は
そんなぼくたちを忘れてしまうけれど
夜の心はちゃんと覚えていて
忘れっぽい昼の心に
いろんな悪戯を試してみたりもするのだ

photopos-1099

2017.9.9



※愛媛県久万高原町・面河溪にて

光はじぶんを見ることができない
光で照らすだけだ
光はヴェールで覆われている

光が現れるためには
光を照らし返すものがなければならない
照らし返すものから
照らし返されなければならない

光はじぶんを見ようとした
見るためには
光でないものがなければならない
光でないもののなかで
はじめて光は現れることができる

それでも
光はじぶんを見ることはできない
その悲しみが
色となって流れてゆく

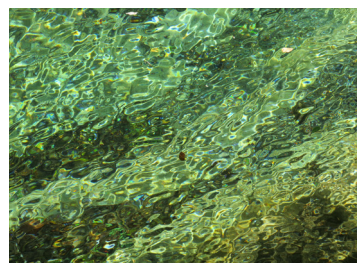
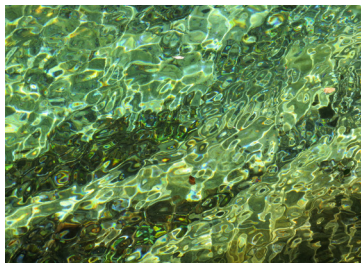
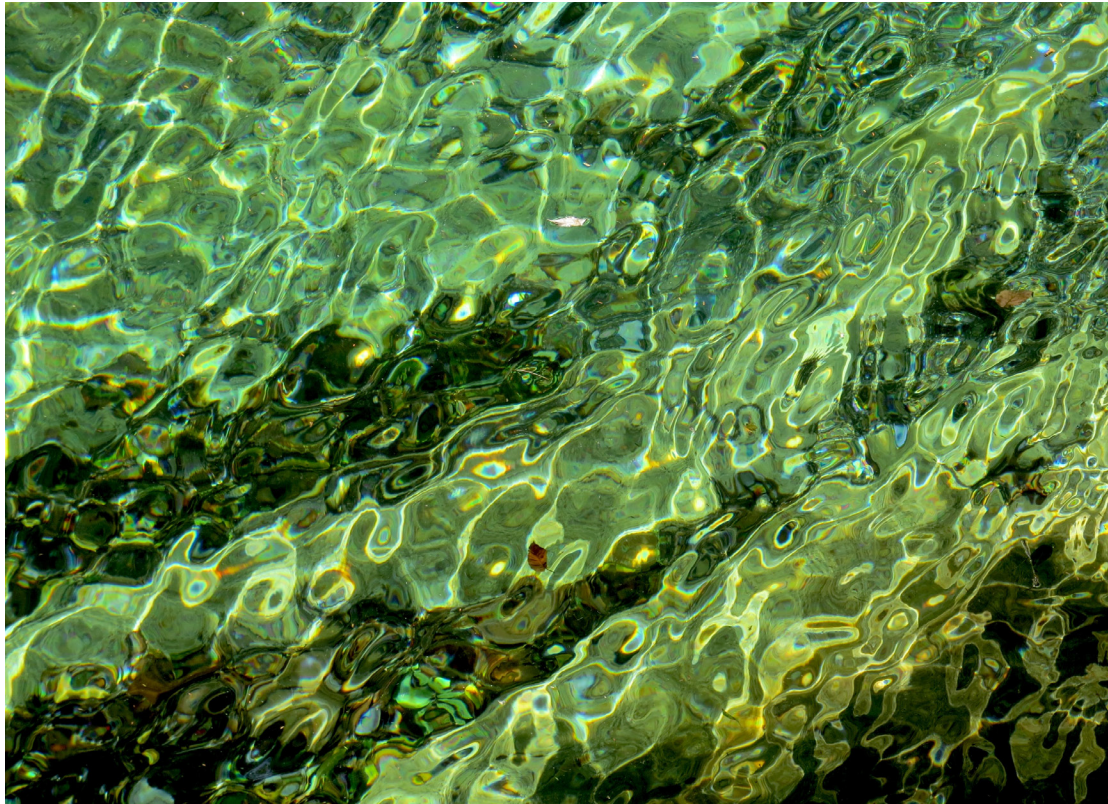
見る者は
じぶんが見えない
見られるものを見るだけだ
見る者はヴェールで覆われている

見るためには
見られるものがなければならない
見られるものから
見られることがなければならない
そこではじめて見える世界が展開する

それでも
見る者は
じぶんを見ることができない
その悲しみが
愛となって流れてゆく

photopos-1100

2017.9.10



※愛媛県久万高原町・面河溪にて

こんなにも
たくさんの言葉があるのに
ほんとうの言葉は見つからない

眠れ眠れよ
やすらかに眠れ
沈黙の内にこそ
言葉は訪れるのだから

こんなにも
たくさんの歌があるのに
聴きたい声は見つからない

眠れ眠れよ
やすらかに眠れ
沈黙の内にこそ
声は訪れるのだから

こんなにも
たくさんの祈りがあるのに
救いの道は見つからない

眠れ眠れよ
やすらかに眠れ
沈黙の内にこそ
道は訪れるのだから

こんなにも
たくさんの生があるのに
永遠の生は見つからない

眠れ眠れよ
やすらかに眠れ
沈黙の内にこそ
永遠の生は訪れるのだから